

## 特別収蔵展「はまなすの花の人鷹野つぎ展」開催中！



昭和63年、浜松文芸館開館時に開催されたのは、「鷹野つぎ展」でした。この度、30数年ぶりに鷹野つぎを取り上げ、特別収蔵展を開催します。1890（明治23）年、浜松町下垂（現・浜松市中区尾張町）に生まれたつぎ（本名岸次）は、浜松高女（現浜松市立高）を卒業後、鷹野弥三郎と恋愛、周囲の反対を押し切って結婚し、夫の深い理解のもと作家としての道を歩んでいきました。島崎藤村に師事し、女流作家として高い評価を得ていた鷹野つぎですが、その人生は、決して順風満帆だったとは言えません。我が子を次から次へと亡くし、夫の事業失敗による貧困と自らの病に苦しんだ生涯でもありました。しかし、鷹野つぎの作品に貫かれているのは、深い愛と悲しみを胸に秘めながらも、一人の自立した女性として、鋭く新しい視点で物事を捉え論じる姿勢です。著書「眞実の鞭」「女性の首途」等に表れるつぎの主張は、決して古いものではなく、むしろ、今の時代にも十分通じるものです。



今回、つぎの年譜をもとに写真、直筆原稿や創作メモ、小説集・随筆・評論の初版本、つぎの作品掲載雑誌、平塚雷鳥らの書簡等、170点余りを展示しました。特に必見は、つぎの母校である浜松市立高校のコーナーです。文芸部の鷹野つぎ研究をはじめ、市立高校の皆さんにとって、鷹野つぎが誇れる先輩であることを伺い知ることができます。また、展示室内には、市立高校の庭に立つ鷹野つぎの詩碑「ふるさとよ はままつ」に曲がつけられコーラスグループ・デュークエイセスが歌う「ふるさとよ はままつ」が流れています。幼少期から女学校時代、文学に目覚めふるさと浜松で幸せな時を過ごした鷹野つぎの、ついに帰ることの叶わなかった故郷への思いを、数々の作品と共に感じていただければ幸いです。

つれづれなるままに・・・「有志竟成」



昨年、ノーベル医学生理学賞を受賞した本庶佑氏。「若い研究者に期待することは？」の問いに、「とにかく、好きなことをやっていくことです。メッセージとして『有志竟成』の文字を送ります。志があれば、必ずなるということです。」と言っておられた。『有志竟成』という言葉をまさか本庶氏から聞くとは。驚きと感激でいっぱいになった。私が、初めてこの言葉を目にしたのは、今から10年前、愛知県設楽群鳳来町一色村の今は廃校になった義母の母校の小学校を訪ねた時のことであった。玄関に掲げられた額に『有志者事竟成』の言葉があったのだ。早速調べたところ、『後漢書』を出典とする故事成語であり、『志有る者事竟に成る』と読むこと、「志をもって強い気持ちで努力をすれば、必ずや竟にその志は成し遂げられる」という意味であること、この中の「竟」の読み方も音読みは「キョウ」訓読みは「ついに」であることが分かった。意味あるいい言葉である。この後、当時勤めていた中学校の生徒たちに紹介し、遂には、校訓に定めた。平成27年9月のことである。志というと、なにやら大それた感があるが、もっと柔軟に捉えていいと思う。目標をもつてもいいのだ。大事なのは、それに向かって努力をすることである。そして、この言葉は、少年や青年だけへの言葉とも言えまい。浜北区K中学校の校庭に立つ、校訓『有志竟成』の碑を思いながら、時に自分の志を確かめている。

## 湖郷の詩人清水みのる 16 高峰秀子が歌った戦前の「森の水車」

浜松文芸館講演会講師 和久田雅之

大東亜戦争さ中の昭和16年、一億総動員体制のもと国中が戦時色一色に塗りつぶされていた。歌謡曲も例外ではなかった。そんなある日、作曲家米山正夫がポリドール改め大東亜レコードに「森の水車」という題名の曲を持ち込んだ。清水みのるは当時、米山とのコンビで天才子役と言われた高峰秀子の歌を何曲か手がけていた。この曲を聴いたみのるは激しく心を揺り動かされた。暗く息苦しく殺伐とした時代に、一陣の爽風が吹き込んできたような気がした。こうした時代に大衆が求めているのは、まさにこのようなメロディにちがいないと思った。

みのるの故郷の伊佐地川の清流には、水車が10ほどまわっていたから、イメージは次から次へととめどなく湧き、15歳頃の少女スター高峰秀子が歌うメロディにふさわしい抒情ゆたかな詩が生まれた。高峰は子役として松竹で育ち、東宝に移籍して「綴り方教室」を撮ったばかりであった。みのるは春待つ乙女のほのぼのとした感傷を描こうとした。

しかし、その第1稿は「乙女が夢見る如き軟弱な歌は時勢に合わない」と内務省の検閲官から突き返されてしまった。そこで「仕事に励まげみなさい。コトコト コットン」と、勤労にいそしむ内容の歌に変わった。発売されたのは、同16年9月である。最初の意図とはだいぶ違ったものになってしまったが、その第1稿も、残念ながら戦災で家と共に灰燼に帰してしまっ

た。ボール紙を芯に挟んだシェラック盤のレコードは、その後まもなく発売禁止となった。「現実離れしていたせいか、時代には受け入れられず、売れたのは2千枚そこそこだった」とみのるはいう。

この間彼は補充兵の教官として応召、昭和19(1944)年御前崎海岸防衛隊長となった。「この時はもう玉砕する覚悟でいた。最後の作品を書き残すつもりで抒情詩を書いてふところに入れておいた。それが『ふるさとの燈台』である」と、日本作詞家協会の石坂まさをに語っている。

(「演歌夜嘶」)

まほ  
真帆片帆 唄をのせてかよう ふるさとの小島よ 灯台の岬よ  
白砂に残る 思い出の いまも ほの 仄かに  
さざ波は さざ波は 胸をゆするよ (2・3番略)

この詩についてみのるは次のように記している。

この作品こそ、四十数年間<作詞家>として賭けてきたわたしの回答である。<世は歌につれ…>の頃、内務省のレコード検閲官の叱責をうけて、住み慣れたポリドールを退社した後、ほんとうに心から歌える時代がくることを待っていた間、すさんだ人々の心の中に、国破れても故郷の山河が黙々と生きているのを、私は感動をこめてみていた。むろん私からも故郷の浜名湖は離れなかった。昭和24年5月、私は田端義夫にこの歌を託して世に問うた。故郷を思う素朴な発想…そこから、「歌」は出発するものであると、かたく信じるゆえにだった。